後宮悪女は逃げ出したい2

朧月あき Aki Oboroduki

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

第一章　素直になれない二人

春栄国は、軍事力、経済力ともに大陸一の規模を誇っている。
若き皇帝、黎翔偉が、先代崩御の混乱に乗じて進軍してきた夏乱国軍を打ち破り、大国にのし上げたからだ。
高い城壁に囲まれた宮廷は、広大な敷地内に絢爛豪華な建物が立ち並ぶ、華やかな街のようだった。その誰しもが憧れる宮廷の最奥、鬱蒼と生い茂る竹藪の先に、そこだけ雰囲気の異なる朽ちた宮がある。
古狸宮――別名〝呪われの宮〟。
居を移した者は狂い死ぬと噂される、恐ろしい宮だった。そのためいつからか、代々の皇帝の怒りを買った者の幽閉先となっている。
その誰もが恐れる古狸宮に、皇帝である黎翔偉の十三番目の妃、李翠雨が彼の逆鱗に触れて送られたことは記憶に新しい。
貞淑を好む皇帝相手に、毒花のような装いをして派手に振る舞い、怒りを招いた

のだ。
なんと愚かな妃だろうと、皆が翠雨を蔑んだ。運よくいまだ生きながらえているようだが、そのうち孤独に死ぬのが関の山と、誰しもが胸中で憐れんでいる。
そんな翠雨が住まう古狸宮では、今日もジャラジャラという賑やかな音が響いていた。
「ポン！」
四角い座卓の一角に座っている翠雨が、翡翠色の瞳を輝かせながら声を放った。
対面（トイメン）に座る白いモフモフの仔犬――霊獣の白澤が、切ったばかりの〝中（チュン）〟の牌に肉球で触れたまま固まる。
「むむ、せっかく手牌がよかったのに流れが変わるではないか！」
「ニャニャ」
白澤の隣にいる九つの頭を持つ巨大な虎のような霊獣――開明獣の豆豆（トウトウ）が『ブツブツ言うな』とばかりに白澤をたしなめた。
「あ、それもポン！」
「う、まさか」
続いて〝白（ハク）〟をポンした翠雨に、白澤が警戒の目を向ける。恐る恐るというふうに、白澤が〝九萬（キューマン）〟の牌を切った。

「ロン！　大三元（ダイサンゲン）！」
「あわわ、これが当たり牌だったとは！　こんなのはまったく読めぬぞ！」
「ニャニャ～！」
頬をげっそりさせて嘆く白澤に対し、豆豆はうれしそうにパチパチと拍手している。翠雨にいつもゴロゴロと喉を鳴らして甘えている豆豆は、彼女が大好きなのだ。
結果はいつものごとく翠雨の圧勝、最下位は白澤だった。
「さて、罰は何にしようかしら？　また犬の真似事はどう？」
牌を片づけつつ、翠雨が歌うように白澤に問いかけた。
「それだけはもう勘弁してくれ。神聖なる霊獣の矜持をズタボロにしおって」
「たまにノリノリになってるくせに。この間も、頼んでもないのに『ここ掘れワンワン！』みたいなことしてたし」
「そのようなことは断じてない……と思うぞ」
「ニャニャニャ！」
翠雨たちが卓を囲んでいる古狸宮の外では、畑で生い茂る青葉に柔らかな陽射しが降り注いでいる。大根に瓜、白菜に蕪（かぶ）、そしてさつま芋。翠雨が痩せた大地を耕し、コツコツと種を撒いて育てた畑だ。
頑張った甲斐があり、今では自給自足に申し分ないほど作物が実るようになった。

片隅にある小さな鶏舎では、鶏たちがコケーと鳴き声を響かせている。
「そういえば、鶏はあれからまた卵を産んだのか？」
白澤が思い出したように言う。
「ええ、今のところ毎朝産んでるわ。年取ってても頑張れるものね」
三羽の牝鶏（めんどり）は、先日翔偉がくれたものだった。翠雨が『卵が食べたい』というようなことをつぶやいた直後だった。
鶏肉にもなれず殺処分する予定の年寄り鶏をくれたとのことだが、これが意外にも新鮮な卵を産み続けている。
「うむ。わしらも人間にしてみれば相当な年寄りだが、頑張っておるしの。次こそはお主に麻雀で勝ってみせるぞ！」
「何度も言うけど、私、今世では役満姫なのよ。でもめげずに挑んでくる白澤、嫌いじゃないわ」
翠雨はカラカラと笑いながら、白澤をむぎゅっと抱きしめる。
「仔犬扱いするでないっ！」
白澤がじたばたする横で、豆豆が「ニャハハ」と面白がるように笑っている。
すると、庭から「翠雨様〜！」という若い女の声がした。
「あ、螢林（けいりん）様と明明（めいめい）が来たようね」

「うむ。ではわしらは隠れていよう」
「ごめんね、いつもありがとう」
ササッと疾風のごとく身を隠す白澤と豆豆。
「あ、翠雨様！　今日は実家から送られてきた菓子を持ってきましたよ。すごく美味しいんでぜひ食べてください」
翠雨が庭に出ると、張螢林がはしゃいだように近づいてきた。ぱっつん前髪の童顔、春栄国の大商家の娘で、翔偉の十二番目の妃にあたる。ほかの妃からいびられていた彼女を翠雨が救ったのをきっかけに、慕われるようになった。
「翠雨様、またそんなに御髪（おくし）を乱して！　あとでお直ししましょう」
螢林の隣で紫色の風呂敷包を抱えている、そばかす顔に栗毛の明明が言った。彼女は翠雨の元専属女官で、面倒見のいい性格から、古狸宮に送られたあともこうしてたびたび様子を見にきてくれている。
「ふたりとも、いつもありがとう。お茶を淹れるから上がってください」
三人での女子会は、今ではすっかり古狸宮の恒例行事になっている。
翠雨はふたりを縁側に案内すると、自家製の大根葉茶を振る舞った。
「ああっ、翠雨様、私がします！　仮にもお妃様なのですから、じっとしていてください」

「そう？　悪いわね、明明」
明明が翠雨の手から茶器を取り上げる。
その横で、螢林はさっそく風呂敷包を広げていた。
「じゃーん！　見てください、華餅です」
木の箱の中には、蓮の模様が刻まれた白い餅が、ぎっしり詰まっていた。繊細で美しい見た目に感動し、翠雨は少女のように瞳を輝かせる。
「まあ、なんて綺麗なの！　こんな模様の餅は初めて見ましたわ」
「お父様が祭祀用の菓子工房を営んでまして、新しい菓子を売り出す度に送ってくださるのです。最近は、こういった模様の華餅が流行っているようですよ」
螢林が得意げに言う。
「味もすごく美味しいわ！」
「中には芋餡が入ってるんです。さつま芋とお砂糖で作った餡ですよ」
「さつま芋で餡が出来るのね。知らなかったです」
翠雨は華餅を味わいながら、感慨深くつぶやいた。
（さつま芋でできるなら、ここでも芋餡が作れるわ。小麦粉と卵で餅のような生地も用意できるし、華餅を作ってみようかしら）
先日、翔偉が来て、例のごとく愛想もなく畑仕事を手伝ってくれた。

その際、瓜の砂糖漬けを出したところ、『美味いな』と思いのほか食いつきがよかったことを思い出す。
（あの人、強面のくせに甘い物好きみたいだから、華餅をあげたら喜ぶんじゃないかしら？　でも、この綺麗な模様はどうやってつけるのかしら？）
翠雨は食べかけの華餅を見つめながら首を傾げる。そしてハッと我に返った。
意図せず翔偉に思いを馳せてしまい、なんだか居心地が悪い。
（鶏をくれたお礼をするだけよ。貸しは作りたくないもの）
気まずさを隠ぺいするように、翠雨は自分で自分を納得させた。
楊梅がいなくなってから、後宮がすっかり穏やかになったこと。皇后にもっとも近いとされる第六妃の凰桃蘭は、相変わらず才色兼備だということ。近衛大将の孟史毅はこの頃ますます逞しくなり、見かけたらつい腕や胸の筋肉に目がいってしまうこと。
そんな他愛ない女子トークをたっぷり楽しみ、夕刻が近づいた頃になって、螢林と明明は後宮のある北宮へと戻っていった。
翠雨が冬賀国からここ春栄国に嫁いで、一年が過ぎた。
前世で槐という名の半妖の少女だった翠雨は、翔偉の先祖である龍景から向けられた歪んだ愛情のせいで呪われ、今世ではことごとく死にかける運命を背負っていた。
だが呪いの根源である槐の鹿の角を龍宮の祭壇から取り戻して、ようやく呪いから

解放される。前世の仲間である白澤や豆豆と古狸宮で和気あいあいと暮らしている今は、毎日が楽しくて仕方がなかった。

麻雀をしたり酒闘を繰り広げたり、畑仕事に精を出したりこうして女子会を開いたり。

皆が、世にも恐ろしい〝呪いの宮〟に送られた翠雨を憐れんでいる中、当の本人は悠々自適な日々を満喫中だったのである。

それから数日後。

翠雨は筆を手に持って卓に向かい、華餅の食譜を考案していた。

「古狸宮にあるもので、どうにか代用できそうだわ」

食譜を書いた紙を、満ち足りた気持ちで眺める。

古狸宮に追放されたあと、最初こそ明明が持ってきてくれる食事に頼っていたが、今では自給自足でまかなえるようになっていた。畑の作物を使ってできる食譜がひとつ増えるたびに心が弾む。

「問題は模様ね。あんなに美しい模様を描けるかしら？」

螢林が持ってきた華餅には、緻密な蓮模様が描かれていた。どちらかというと手先が不器用な翠雨は、竹針であのようなものを描ける自信がない。

「模様をなしにすることもできるけど、やっぱりこだわりたいわよね」

翔偉にあげるものなので、手を抜きたくない。

彼に満足してもらいたいからというより、馬鹿にされたくないから。そうに決まってると、翠雨は自分を納得させた。

トテトテ、ズズズ……という音が廊下から近づいてくる。

（白澤が何かを咥えて引きずってる音ね。かわいい）

思ったとおり、袋を口に咥えた白澤が、戸からひょこっと顔を出す。

「槐、ちょっといいか」

「どうしたの？」

「これを見てくれ」

白澤が、口を使って袋の中身を床に撒いた。

色鮮やかな小瓶や煌びやかな入れ物、銅鏡や玉佩もある。

「わしが今までコツコツ集めてきた珍品だ」

「なるほど、それで前に『ここ掘れワンワン！』みたいなことしてたのね」

「むむっ、犬と一緒にするでない。知性のあるわしだからこその、崇高な趣味であるぞ」

「はいはい。で、これがどうしたの？」

「この中からひとつくれてやる。好きなものを選ぶといい。その代わり麻雀に負けた罰として犬の真似をするというのは、取り消してほしい」
モフモフの口を動かし、あくまでも真剣な調子で語る。
（かわいいから、もう許してあげよっか）
「いいわよ。あと、ちょっとだけスリスリもさせて」
翠雨はにんまりと笑うと、白澤を抱き上げて頬ずりした。
「そういうのはいいから、早く選ぶのだ！」
「分かった分かった」
白澤に催促され、翠雨はガラクタ……もとい、白澤のコレクションへと手を伸ばす。
「これだけのもの、よく集めたわね。ん、これは何？」
翠雨は木でできた箱のようなものを手に取った。小物入れのようだが、蓋は見当たらない。奇妙なことに、葉のような装飾が外側ではなく内側に彫りこまれていた。
「どうして内側に飾りがあるのかしら？　普通は外側よね。せっかく綺麗なのに、見えないなんてもったいない」
「それが何かは知らん」
翠雨はその小さな木箱をじっと観察した。やがて、「あっ」と声を上げる。
（この飾り、何かに似ていると思ったら、華餅の模様に似ているんだわ。餅を押し込

んだら、竹針（ちくしん）で細かく描かないでも、綺麗な葉模様がつくはず）
翠雨は思いがけない発見に心躍らせた。
「白澤、これにしていい？」
「いいだろう。よって、犬の真似事はなしだぞ」
「ええ、もちろんよ。ところでこの小箱、どこで見つけたの？」
「ここだ」
白澤がふんっと鼻を鳴らし、翠雨は目を瞬いた。
「ここって、古狸宮のこと？」
「そうだ。この宮には、もの珍しい物が多いからの」
「そういえば、置いてある食器も、北宮では見たことがない柄や形のものばかりよね。そもそも、古狸宮って、いつどういう経緯で建てられたのかしら？」
住んだら最後、狂い死ぬ〝呪われの宮〟として恐れられている以上の情報を、翠雨は知らない。それにその呼び名がついたのは、古狸宮が建てられた由来によるわけではなく、ここに住んでいる霊獣――白澤と豆豆が原因だった。
今から二百年ほど前、半妖のため人間に迫害され、鼠翁山（そおうざん）に追放された槐は、霊獣たちに慕われ妖王となった。だが、黎龍景に無惨にも殺される。龍景はその後春栄国の初代皇帝に君臨した。

とりわけ槐と親しかった白澤と豆豆は、皇帝龍景への仇討ちのために皇宮内で、道士が唯一結界を張れなかった古狸宮に潜伏。龍景の死後はその子孫を標的とし、虎視眈々と復讐の機会をうかがっていたが、結界のせいで何もできないまま月日が流れる。そして不思議な縁で、翠雨として転生した槐に再会したのだった。

「さあ、知らん。わしらが住み始めた頃はすでに、なかなか年季が入っておったぞ」

「なら、そうとう前に建てられたってことよね」

「おっ！　ちょうど、答えを教えてくれそうな奴が来たぞ」

白澤が、円窓（えんちょう）の向こうを見ながら言う。

庭一面に広がる畑の真ん中に、いつの間にか男がひとり、しゃがみ込んでいた。

高く結い上げられた背中までの黒い髻髪（けいはつ）に、鼻梁の通った男らしくも美しい顔立ち。

春栄国の若き皇帝黎翔偉は、真剣な表情で瓜の葉を観察している。この国の誰よりも華々しい立場にいながら、彼はしょっちゅう皇宮の片隅にある古狸宮に畑の様子を見にきていた。

特殊な生い立ちのせいで、畑仕事が好きらしい。土と草の匂いに満ちたこの場所にいると、落ち着くとも言っていた。

「皇帝陛下にご挨拶申し上げます」

翠雨が表に出て声をかけても、彼は「ああ」と気のない返事をしただけだった。

愛想というものを欠いて生まれてきたような男なので、翠雨は気にしない。

「葉が若干黄色くなっている箇所がある。水のやりすぎではないか？」

「水をやりすぎると、何か問題があるのですか？」

「根が弱り、作物が育たなくなる」

「なるほど、適量が大事なのですね」

翠雨は懐から紙と筆を取り出し、さっそく書き留めた。

彼女は畑仕事に関してはド素人であり、翔偉の助言を頼りにしていた。彼は愛想のない堅物ではあるが、剣術の腕と畑の知識に関しては一目置いている。

「皇帝陛下、お伺いしたいことがあるのですが」

「なんだ」

「この古狸宮は、いつ頃、どんな経緯で建てられたのですか？」

翔偉が、じっと翠雨を見つめる。

右が銀、左が黒の虹彩異色眼（オッドアイ）の神秘的な美しさについ見惚れそうになり、翠雨は慌てて視線を下げた。

「知らん」

「へ？」

翠雨は間の抜けた声を漏らす。

「仮にも皇帝なのに、ご自分の皇宮のことも分からないのですか？」
「知らんもんは知らん。興味もない」
しれっと言うと、翔偉は興味をなくしたように口を閉ざした。
（相変わらず、どこか足りてない男ね）
翠雨はがっかりな目で翔偉を見る。皇宮のどこかにある文献を調べたら分かるのかもしれないが、それほど興味はなかった。
（とにかく、餅の型があってよかった。綺麗で美味しい餅を作って、必ず翔偉を唸らせてみせるわ）
その後は特に会話もないまま、ふたりで黙々と畑仕事に没頭した。いつものことである。
涼しい風が吹き、古狸宮のそばにある竹林をサワサワと揺らす。鶏たちの鳴き声が響く中、陽の光が穏やかに畑に降り注ぐ。
都の真ん中とは思えないほど長閑（のどか）な場所だった。人間の妬みや策略から解放されて、ただ自然に溶け込めるひととき。
翔偉とは相変わらずまったく相容れないが、この時間だけは、不思議と心が繋がっている気分になる。
畑仕事がひと段落すると、翠雨は竹筒に入れた水を一気に飲み干した。

「ぷはっ！　あ～、おいしい！」
翔偉も鍬（くわ）で耕す手を止めた。
「皇帝陛下も飲みますか？」
「この竹筒でか？」
翠雨が差し出した竹筒を、翔偉がしかめ面で見ている。
（私が口を付けたものだから嫌かしら？）
失礼なこの男なら、考えかねない。
翠雨は内心ムッとした。
「不快なら――」
「もらおう」
ところが翠雨が竹筒を引っ込める前に、彼の手がかっさらっていく。
ごくごくと竹筒の中の水を飲む翔偉を、翠雨は驚きの目で見つめた。
翠雨が口を付けた竹筒に、抵抗があったわけではないらしい。
（なら、さっきの躊躇いはなんだったのよ）
翔偉はあっという間に竹筒の中の水を飲み干した。
「普通の水だな」
「純粋な井戸水ですので。皇宮で出されるような李（すもも）を搾ったものでなくて申し訳ござ

いません」
翠雨は棘のある口調で答えた。
「だが、うまい」
翔偉がサラリと言い、かすかに微笑む。
翠雨は思いがけずドキリとした。
基本不愛想で失礼なのに、ときどき少年じみた顔を見せるのが、この男のズルいところである。
翔偉は翠雨に竹筒を返すと、立ち上がった。
翠雨がつられるように空を見上げれば、太陽の位置が大分傾いている。そろそろ皇宮に戻るつもりなのだろう。
「李翠雨」
立ち去りかけたところで、翔偉が翠雨を振り返った。
「今度の〝新月の宴〟にお前も参加しろ」
毎月北宮で開かれる〝新月の宴〟には、多くの宮廷人が集う。後宮の妃たちが芸を披露し宮中で働く男たちを癒す場となっていた。
「ですが、追放の身である私がたびたび祝宴に顔を出すのは、変ではないでしょうか？　先日は〝龍賀の儀〟にも参加しましたし」

（せっかく後宮を離れて古狸宮で悠々自適に生活を送っているのに、どうしてそんな面倒なことに参加しないといけないのよ。〝龍賀の儀〟は安華山（あんかざん）で川に転落したところを助けられた恩を返すために参加したけど、今の私には彼の言葉に従う義理はないわ）
翠雨は苦笑いを浮かべ、心の中で不満をぶちまける。
翔偉は動じずに先を続けた。
「もっとも優れた芸を披露した妃には、今回は景品を用意している。遠い南国の商人から仕入れた、子供の背丈ほどもある特大の狗尾草（えのころぐさ）だ」
「え⁉　参加します！」
翠雨は瞬く間に瞳を輝かせた。
狗尾草（えのころぐさ）は豆豆の大好きな玩具である。だが巨体がゆえに、小さな狗尾草（えのころぐさ）で遊ぶのはいつも窮屈そうだった。
（特大なら、豆豆が心ゆくままじゃれることができるわ）
翔偉は、さっきとは打って変わった明るい表情の翠雨を、しばらくの間じっと眺めていた。
やがて視線を逸らし「そうか」とだけ答える。
彼の耳のあたりが赤くなっているのに、特大狗尾草（えのころぐさ）のことで頭がいっぱいになって

いる翠雨は気づかない。

（もっとも優れた芸を披露すればいいのね。豆豆のために、全力で頑張らなくちゃ。琵琶の名手、桃蘭様を何としても負かしてやるわ）

第六妃の凰桃蘭は、春栄国で強い権力を持つ凰一族の娘で、後宮の中核だった。彼女が奏でる琵琶は大陸一美しい音色とまで噂されている。

「期待しているぞ」

俄然やる気になっている翠雨に翔偉は心なしか優しい声をかけると、竹林の向こうに消えていった。

「やれやれ、狗尾草（えのころぐさ）が景品など、聞いたこともないわ。分かりやすく翠雨を惹きつけおって」

知らぬ間に隣にいた白澤が、翔偉の去っていった方向を眺めながら言う。

「ん？　どういうこと？」

「分からぬのならいい。お主、鈍感なところは、前世とまったく一緒だな」

白澤が呆れたように言った。

「ニャニャニャー」

外に走り出てきた豆豆が、翠雨にゴロゴロと甘える。翠雨は安定のモフモフに気を奪われ、白澤の意味不明な発言のことなど忘れてしまった。

「豆豆、もしかしてさっきの狗尾草（えのころぐさ）の話、聞いてたの？」

「ニャニャニャ～！」

「そうよね、欲しいわよね。豆豆のために、必ず手に入れて見せるから待ってて。目指すは打倒、桃蘭様よ！」

翠雨は、豆豆をぎゅっと抱きしめながら、胸の内で闘志を燃やしたのだった。

第二章　桃蘭のもてなし

夕食後、翔偉の内殿を桃蘭が訪ねてきた。

「定期的に妃ひとりひとりと対話し、動向に目を配っております。今のところ問題はございません」

桃蘭が優雅な口調で語る。

楊梅の妃いびりが判明し、里に帰して以降、桃蘭は事あるごとに後宮の様子を知らせに来る。後宮の争いごとを嫌う翔偉のために、率先して厳しく取り締まっているようだ。

身分の低い母から生まれたため野放しにされて育った翔偉だが、流行り病で兄弟が全員死んで以降は、春栄国唯一の跡取りとして厳しく太子学を教え込まれてきた。

凰一族の娘である桃蘭はその頃から皇宮に出入りしており、ともに講学を受けることもあった。翔偉にとって、いわば姉のような存在である。

「いつもすまない」

「後宮の平穏を守ることは私の役目ですので、お気になさらず。小人数とはいえ、気

は抜けません」

梅がいなくなった現在、後宮には十二人の妃がいるが、一妃から五妃までは先代の妃にあたり、実質は隠居生活を送っている。八妃と九妃には皇帝接近禁止令が下されており、そして十三妃は古狸宮に幽閉の身という状態だった。

「ですが、少しだけ気になることがございまして」

桃蘭が、言いにくそうに切り出した。

「言ってみろ」

「女官たち曰く、皇后位が空位である状況を、妃たちが懸念している声をたびたび耳にするようです」

本来、早い段階で妃の中から皇后を選ばねばならないが、翔偉は先送りにしていた。というより、選ぶつもりがなかった。桃蘭を含む古参の妃は、そんな翔偉の意志を承知している。

そもそも翔偉は即位した際、後宮を廃止するつもりでいたのだ。だが猛史穀に止められ、今に至る。

ちなみに後宮内争いの一番の火種となる子も、誰とも成すつもりがない。血の繋がりにこだわりはなく、いずれ己の後任に適した者を選べばいいと思っていた――のだが。

「春華房を整えるよう、指示しておく」
翔偉の言葉に、桃蘭が驚いたように目を瞠る。
春華房とは、皇宮で最も広く優雅な部屋、つまり代々の皇后が使う部屋だった。先代の皇后が崩御して以降封鎖し、日の目を見ていない。
「それは、つまり」
「深い意味はない。付け焼刃にすぎないが、後宮内の不満の声も少しは沈静されるだろう」
「――かしこまりました」
桃蘭が粛々とこうべを垂れた。
翔偉は、後宮の最奥にある、固く閉ざされた両開きの戸を思い浮かべる。艶のある朱塗りに、梅、桃、桜が描かれ、まるで淡雪のように金粉が散らされた、ひときわ豪奢な戸だった。
（春華房か。俺の御代では実質使うことはないだろうな。もしも皇后を据えるなら、聡明で心が清く、なおかつ図太い神経の者でないと無理だろう）
蝶よ花よと育てられた妃たちに、なかなかその素質を持つ者はいない。
心の清さと図太い神経、両方を備え持つ女は、そう簡単に現れるものではない。
だがふと、頬に土をつけてカラカラと笑う翠雨の顔が浮かび、翔偉は動揺した。

（……なぜあの女の顔を思い出すのだ）
ゴホッと咳ばらいをして、気持ちを落ち着かせる。
そこで、立ち去ったと思っていた桃蘭がまだその場に残っていることに気づいた。
「まだ何かあるのか？」
桃蘭が、ゆっくりと伏せていた顔を上げた。
珍しく、表情に陰が落ちている。
「この頃、たびたび姿がお見えにならないと聞きました。竹藪の方に行くお姿を何度かお見かけしたと、女官が申しておりました。どこに行かれているのですか？」
翔偉は息を呑んだ。
口を閉ざし、険しい表情で桃蘭を見据える。
土と緑の香りにあふれた古狸宮は、いわば翔偉の憩いの場。皇帝ではなくひとりの人間に返れるあの場所へ通うことを、誰にも妨げられたくない。
「――お前に話す必要はない」
己でも驚くほどに、冷ややかな声が出た。
翔偉のただならぬ気配を察知したのか、桃蘭の顔に焦りが浮かぶ。
「出すぎたことを申しました。これにて失礼いたします」
だが桃蘭は、すぐにいつもの優雅な笑みを取り戻すと、早々に内殿から出ていった。

「猛史穀が参りました」
桃蘭と入れ替わるようにして、孟史穀がやってくる。赤髪をざっくりと結い上げた屈強な体躯の彼は、相変わらず豪傑な見た目をしていた。大きな手にしっくりと馴染む重々しい酒壺を持っている。
「なんの用だ」
「たまには酒を飲み交わす相手も必要かと思いまして」
史穀がニッと笑い、翔偉の前に座った。
「たまにどころか、二日おきには来ているだろう」
「まあまあ、そう言わずに」
従兄の彼とは、剣技を共に学んだ仲である。家臣とはいえ、翔偉とふたりきりのときは、無遠慮に振る舞うことを許していた。
「ついでに、内殿の前で出くわした者も連れてまいりました」
史穀が顎で合図を送ると、戸の向こうから、おずおずと男が顔を出す。冠巾を被った茶髪の優男、宮廷道士の周各陵である。
翔偉が眉間に皺を寄せた。
「またあれか、易経か」
「よくお分かりになりましたね。さすが皇帝陛下です」

各陵が驚いたように言う。
この道士の易経はよく当たる。だが、大まかで具体性に欠けるのが難点だった。
「また『不穏な気配』と出たか」
翔偉は酒杯にとくとくと酒を注ぎながら聞いた。
各陵が深々と頭を下げる。
「お、お見通しのようで。御見それいたしました！　ですが今回は宮中ではなく、国のかなり南方に凶の兆しが出ています」
「かなり南方というと、元夏群のあたりか？」
史穀が酒を煽りつつ口を挟んだ。
元夏群とは、元夏乱国領を指す。
長きに渡り、この大陸は春栄国、夏乱国、秋律国、冬賀国の四国によって成り立っていた。中でも春栄国と夏乱国はことあるごとに火花を散らしていたが、春栄国の先代王が崩御した際、混乱に乗じて夏乱国が春栄国に進軍。
だが新しく君主となった翔偉は軍を率いて夏乱国軍に打ち勝ち、秋律国と冬賀国を従えて、大陸の覇者となった。
夏乱国は消滅し、元夏乱国領は新地区として太守を置いて取り締まっている。宰相かつ桃蘭の父である凰博文のたっての希望で、太守は彼に兼任させていた。不遇な子

供時代から翔偉に目をかけてくれた彼には、厚い信頼を寄せている。
「夏乱国の残党が発起しているのではないかという噂を聞いた。駐兵の武器庫が何者かに襲われ、そんな噂が流れたらしい」
史穀が渋い顔をし、翔偉は腕を組んで考え込んだ。
まだ噂の段階にすぎないが、残党の規模が大きくなれば厄介だ。各陵の易経が凶を示したのなら、この先春栄国の脅威となる可能性は十分にある。
（博文に任せてはいるが、早めに手を打っておいた方がいいだろう）
「なるほど。ただちに調査隊を編成し、元夏群に送れ。結果が分かり次第報告するように」
翔偉は粛然と声を放った。
「御意」
史穀は心を許した従兄から近衛大将の顔に戻ると、姿勢を正して返事をした。

❖

桃蘭から文が届いたのは、翔偉に新月の宴に出るよう誘われてから、数日後のことだった。

「桃蘭様から、お茶に誘われたわ。北宮にはあまり行きたくないけど、これは敵視察のいい機会ね。豆豆のために、なんとしても巨大狗尾草（えのころぐさ）を手に入れたいもの」
古狸宮にて、文を手にした翠雨は、爛々と瞳を輝かせる。
「桃蘭様が新月の宴で琵琶を披露しないなら、私にも勝算がある。琵琶を披露するなら、より練習に励まなければと、気合いを入れることができるわ」
「新月の宴で何を披露するつもりなんだ？　お主の特技といえば麻雀か酒合戦だが、後宮で披露するわけにもいくまい」
白澤が翠雨の膝の上に寝そべりながら言った。
「歌で勝負しようと思っているの」
「歌だと？　得意なのか？」
「ええ。人前で歌ったことはないけど、とっても綺麗な歌声よ」
「それなら歌ってみろ。勝てるかどうか判断してやる」
「いいわ。しっかり聞いていてね」
翠雨は咳ばらいをして声の調子を整えると、前世で覚えた歌を存分に披露する。歌い終えて期待の目で白澤を見ると、なんとも複雑な顔をした彼と目が合った。
「……本当に歌で挑むつもりなのか？　あまりにもひどいぞ」
「ええっ、ちゃんと聞いてた⁉　ワンコには歌のうまさが分からないのかしら」

「根っからの音痴のようだな……。あと、わしはワンコではない」
心外というように、白澤がフンッと鼻を鳴らす。
結局のところ、翠雨は白澤の反対を押し切って歌の練習を重ね、桃蘭との茶会の日を迎えた。

「ようこそいらっしゃいました」
出迎えてくれた桃蘭は、漆黒の髪に琥珀色の瞳をした、相変わらず白蓮(はくれん)のように美しい女性だった。
「桃蘭様、本日はお招きくださりありがとうございます」
「こちらこそ、来ていただけて光栄ですわ。前から翠雨様とじっくりお話がしたいと思っていたのです」
桃蘭が微笑む。慎ましやかなのに目を奪われる、人知れず咲く花のような笑みに、螢林をいびっていた楊梅のような邪気はない。
翠雨は、桃蘭を心から綺麗だと思った。
この房に来るまで、桃蘭がいよいよ皇后になるのではという、女官たちの噂の声を耳にした。
前々からもっとも皇后に近い存在だとは言われていたが、最近になって、皇后が使う房がようやく整えられたらしい。
とはいえ古狸宮での気ままな暮らしだけを望んでいる翠雨には、わりとどうでもいいことだった。
「失礼いたします」
女官たちが、翠雨と桃蘭が座る卓に、次から次へと茶菓子や果物を並べていく。そのあまりの豪勢さに、翠雨は目を瞠(みは)った。
桃色に染まった寿桃包(シュウタオパオ)に、くるみのたっぷり飾られた胡餅(こへい)、杏(あんず)を煮詰めた飴果(かんか)、たっぷりの柘榴(ざくろ)と葡萄(ぶどう)。
「まあ、どれも本当に美味しそうですわ！」
「翠雨様に喜んでいただきたくて、いろいろ揃えたのです。気に入っていただけたようでうれしいですわ」
瞳を輝かせる翠雨に向けて、桃蘭が春風のようにふわりと微笑んだ。
（本当に美味しい……！　できれば何個かこっそり懐にしまって、白澤と豆豆にも食べさせてあげたいわ）
「翠雨様。ひょっとすると、皇帝陛下に今度の新月の宴に呼ばれたのではなくて？」
翠雨が人の目を盗んで菓子を隠す方法を考えていると、桃蘭に問いかけられた。
「どうしてご存じなのですか？」

「皇帝陛下は、龍賀の儀にも翠雨様をお呼びしていましたでしょう？　小北地方の件で、翠雨様によほどのご恩を感じていらっしゃるようね」
小北地方で原因不明の疫病が流行り、人々を恐怖に陥れたことがあった。翠雨は前世の友人である仙人の漸を頼り、疫病を鎮めることに成功した。
「今後も、事あるごとに宴に呼ばれるのではないかしら？」
「そうでしょうか」
翠雨にしてみたら、宴に呼ばれるのは面倒でしかない。できれば呼ばないでほしいが、皇帝命令に背くわけにもいかなかった。
（古狸宮に住み続けさせてくれるのには、感謝してるけど）
流刑地のような場所として認知されている古狸宮を、翠雨が皇宮内のどの場所よりも好んでいることを、翔偉は知っている。つまり、まったく罰になっていないのだ。
それにもかかわらず住み続けさせてくれるのは、彼の計らいにほかならない。そういう優しいところも、あの男はときに持ち合わせていた。
（だから、ちょっと厄介なのよね）
前世、身勝手な理由で槐を殺した男と同じ顔をした彼を、できれば憎みたい。
だがどうしても憎み切れず、この頃はむしろ一緒にいると居心地のよさまで感じてしまい、翠雨は戸惑っていた。

（あんな男のことを考えている場合じゃない。本題に入らなきゃ）
「桃蘭様は、今度の新月の宴で、何を披露されるのですか？」
「歌よ」
「歌……！」
サラリと答えられ、翠雨は思わず声を上げた。
桃蘭が琵琶を披露するなら勝算は無いに等しいが、歌であれば別だ。
白澤は否定的だったが、翠雨は自らの歌唱力に自信がある。
「ええ。子供の頃、皇帝陛下に歌声を褒められたことがあるのです。少しでも、日々お忙しい皇帝陛下の癒しになればと思いまして」
桃蘭が心配そうに小首をかしげる。そんな些細な仕草すら美しく、翠雨は思わず見惚れた。
翠雨の目から見ても、彼女こそが皇后にふさわしいと思う。翔偉がそう望むのも、十分に理解できた。
それなのに、なぜか胸の奥がチクリとする。
（誰が皇后になろうが、どうでもいいことじゃない）
翠雨は心の動揺から目を背けるように、朱色の椀に盛られた橙色の餡果に手を伸ばした。

柔らかい果肉の感触とともに甘酸っぱさが口の中いっぱいに広がり、心を和ませる。
翠雨は感嘆の息を吐いた。
「こんなに美味しい菓子は初めて食べました」
「ふふ。菓子作りを得意とする庖人を新しく雇ったのです。長年修行を詰んだ実績のある者のようですよ」
（翔偉は庖人にこだわりがあるのね）
翠雨は飴果を味わいながら、翔偉が瓜の砂糖漬けをいつになくほころんだ表情で食べていた様子を思い出す。
「皇帝陛下は、甘い物がお好きですものね」
そうつぶやくと、桃蘭が一瞬だけ真顔になった。
だが、すぐにいつもの笑みを浮かべる。
「そうなのですよ。よくご存じですね」
桃蘭の些細な変化が、翠雨の心に引っかかる。
（もしかして、翔偉は桃蘭様には甘い物が好きなことを秘密にしてるの？）
宮中にいるときと古狸宮にいるときとでは、翔偉は雰囲気が違う。皇帝としての矜持が、彼をそうさせているのだろう。
（つまり、宮中ではかっこつけてるのね。古狸宮では泥だらけだったり、普通の男みたいに笑ったりするのに）

翠雨は心の中でクスリと笑う。
翔偉のことを思い浮かべていると、桃蘭と目が合った。
「暮らしはどうですか？　不便はしていませんか？」
「はい。ギリギリの生活ですが、どうにか過ごしています」
「そう、翠雨様はお強いのね。私にできることがあれば、いつでも言ってくださいね」
桃蘭が親しげに目を細める。
「ありがとうございます。桃蘭様」
驕らない桃蘭の優しさに翠雨は心打たれ、そしてまたかすかな胸の痛みを感じたのだった。

第三章　菘菜と剣珮

新月の宴は、散々な結果となった。

翠雨が自慢の歌声を披露したのに、なぜか歌い終わった後、その場には寒々しい空気が流れていたのである。

引きつった顔をしている官吏や妃を見て、鈍感な翠雨もさすがに自分のやらかしに気づく。翔偉だけが、上座で笑いをこらえるようにうつむき震えていたのもまた、彼女の気分を逆撫でした。

一方の桃蘭の歌声は、天女かと思うほどの美しさで、拍手喝采をさらっていた。

もちろんのこと、特大狗尾草は桃蘭のものに。翠雨は悔しさで地団太を踏みたい気持ちを必死にこらえながら、北宮をあとにし、古狸宮に戻ったのだった。

「ああ～、悔しい！　だいたい桃蘭様が特大狗尾草をもらっても、使い道なんてないでしょうに。豆豆ごめんね」

「ニャゴ～」

翠雨は残念そうな豆豆の大きな体を抱きしめ、繰り返し撫でる。

「ニャンニャン」

大丈夫、とでも言うように、豆豆がかわいく鳴いた。

「歌声がここまで聞こえていたぞ。なぜ、あれで勝てると思ったのだ」

白澤が、心底不思議そうにぼやいている。

「ん？　白澤、何か言った？」

「……たいしたことではない。それより」

ゲフンと咳ばらいをする白澤。

「菘菜はどうなったのだ。そろそろ出来る頃ではないか？」

「菘菜……そうだわ！　様子を見なくちゃ」

翠雨はいそいそと台所に向かった。

菘菜とは、白菜と蕪を塩や酒で漬け込んで発酵させたものである。保存が利くので、少し前に、大量に収穫した野菜で試しに漬けてみた。

翠雨は台所の隅に安置した陶製の壺を取り出し、木蓋を開ける。しんなりとした蕪のひとつを味見し、顔を輝かせた。

「歯ごたえがあって美味しい！」

感動のあまり、新月の宴での失態など、あっという間に忘れてしまう。

「どれ、わしも食べてみよう。うむ、酒が進みそうな味だな」

どさくさに紛れて勝手に味見をしている白澤も満足そうだ。
（私が育てた白菜と蕪で、こんなにも美味しいものが出来るなんて）
翠雨は、古狸宮に来てからの、畑仕事に勤しんだ日々を思い起こす。
はじめは畑に関する知識も種もなく、ただひたすら土だけを耕した。そんな翠雨のもとに苗や種、さらには作物の育て方の指南書まで届けてくれたのは翔偉だった。
畑に来ては汗だくになって作物の世話をしていた彼の姿が頭に浮かぶ。
翔偉が翠雨のためにしたわけではないと分かっている。彼は畑仕事が好きで、あくまでも自分を癒したいから、古狸宮に来るだけだ。
それでも、彼がいなかったら作物を育てられなかったのは事実。
「お主、味見のしすぎではないか？」
「そう？　だって美味しいんだもの」
（私の歌を大笑いしたのは許せないけど……。次に彼が古狸宮に来たら、菘菜をほんの少し味見させてあげようかしら。ほんのすこーーしだけ）
翠雨は菘菜をカリコリと噛み砕きながら、ぼんやりそんなことを思ったのだった。
ところが、待てども翔偉は現れなかった。
いつもならそろそろという頃になっても、まったく来る気配がない。
（せっかく菘菜を味見させてあげようと思ったのに。こういう時に限って来ないんだから）

翠雨は荒々しく畑を耕しながら考える。胸がひどくモヤモヤしていた。
だがあることに気づき、鍬を持っていた手を止める。
（よくよく考えたら、彼が来なくなってよかったんじゃない。私は彼とは関わることなく、古狸宮で平穏に暮らすことを望んでいたんだから）
そんなふうに前向きに考えようとしたものの、なかなかうまくいかない。
翔偉のいない畑は、いつもよりずいぶん広く感じた。
（別に翔偉に会いたいわけじゃないけど……。今まで来ていた人が音沙汰なくなると、不安になるのが人の心というものよ）
翠雨はそうやって自分に言い聞かせ、どうにか消化不良な気持ちをやり過ごしたのだった。

そんなある日、古狸宮での女子会で、翠雨は螢林から思いがけない話を聞く。
「どうやら、皇帝陛下が軍を率いて出兵なさるようですよ」
寝耳に水な話に、翠雨は茶器を手にしたまま固まった。
「出兵？　どこと戦をなさるの？」
「詳しい話は分かりませんが、かなり南の方に行かれるとか。敵の怪しい動き？　み

たいなのがあったようで、今宮中はかなりバタバタしているのです」
螢林がきょとんとした調子で言う。世間知らずでのんびりとした性格の彼女は、この手の話に疎いようだ。
「元夏群に送った調査隊が殺されたのをきっかけに、戦が勃発したと聞きました」
明明が補足を加える。
翠雨は、ふたりの話から事のあらましを推測した。
（元夏群というと、以前の夏乱国領だわ。元夏乱国民には、翔偉に恨みを持っている人がきっと大勢いる。残党が発起している兆しがあったから、翔偉は調査隊を送ったのかもしれない。出兵するということは、残党はかなりの規模だったようね）
夏乱国は、翔偉の父である前王が崩御した際、混乱に乗じて春栄国に攻め込んできた。だが急遽次の王となった翔偉は、驚異的な戦略と武力で夏乱国を制圧。
夏乱国の王をはじめ、王族は容赦なく処刑されたと聞く。若輩の君主とは思えない残虐ぶりに人々は震え上がり、〝血濡れの狂帝〟という翔偉のふたつ名は広く知られることとなった。
「戦なんて嫌ですわ。皇都に害はなくとも、不安になってしまいます」
「皇帝陛下のことですから、心配は無用ですよ。軍神とも呼ばれる皇帝陛下を挑発するなど、身のほど知らずがいるものですね」

怖がる螢林を、明明がなだめていた。
「翠雨様も、そう思いませんか？」
「ええ、そうですね。皇帝陛下に敵う者は、この大陸にはいないと思います」
翔偉には、太陽の女神である羲和の加護がついていると、仙人の漸が言っていた。翠雨を悩ませてきた呪いを打ち消すほどの陽の気らしい。
翠雨は、安華山にて彼の戦いっぷりを目にしたこともある。飛翔のごとく素早く圧倒されるほど強靭で、無敵だった。
「翠雨様がおっしゃるなら、きっとそうなのですね。安心しました」
（翔偉がここしばらく古狸宮に来なかったのは、出兵の準備があったからなのね。あの人ならきっと、国を勝利に導いて戻ってくるわ。あの強さは尋常じゃないもの）
そう思いつつも、心の奥底には、もしも彼が死んだら？　という不安もたしかにあった。
翔偉は並外れた強さを持つが、何があるか分からないのが戦争である。
敵兵の狙いは、翔偉の首である。本来なら大将は安全な城に留まるところだが、あの男は先陣を切って戦地を駆ける阿呆なのだ。
螢林はすっかりもとの調子を取り戻し、明明と孟史穀の筋肉談義で盛り上がっている。翠雨は彼女たちの話には入らず、茶杯を卓に置き、円窓から外を眺めた。

畑では、みずみずしい青葉が風に揺れている。
『普通の水だな――だが、うまい』
畑の真ん中で竹筒の中身を飲み干し、少年じみた笑みを浮かべた翔偉の姿を思い出す。
胸の奥がぎゅっと握りしめられたようになり、翠雨は落ち着かない気持ちになった。

その夜翠雨は、白澤と豆豆が寝たのを見届けてから、こっそり古狸宮の奥にある隠し扉を開けた。
細長い木箱から取り出したのは、布にくるまれた鹿の角である。
翠雨の前世――半妖の槐の頭から生えていたそれは、二百年前、龍景が彼女に呪術をかけるために切り落とした。長らく龍宮の奥にある祭壇にしまわれていたが、翠雨が小北地方の疫病を鎮めた褒美として、翔偉から譲り受けた。
翠雨は懐から刀を取り出すと、一本の角の先を削り取った。桐で先端に穴を開ける。
（槐には治癒の力があったから、お守りになるかもしれない）
ありあわせの糸で組み紐を結い、穴を開けた角の欠片に通せば、剣の柄（つか）に取り付ける即席の剣珮（けんぱい）が仕上がった。
翔偉に、まだ死なれては困るのだ。

翠雨にとって古狸宮が快適だと分かりながらも住まわせてくれたり、畑仕事を教えてくれたり手伝ってくれたり。嫌いな顔の男なのに、彼には借りが多すぎる。
（今の状態で死なれたら煮え切らない。絶対に生きて帰ってもらわないと）
翠雨は出来上がったばかりの不格好な剣珮（けんぱい）を見つめながら、まるで言い訳のように、そんなことを思った。

❖

元夏群に向けて出発する日。翔偉は戦衣を身にまとい、出立の儀に立ち会っていた。
中庭に兵士がズラリと並び、孟史穀が彼らを鼓舞している。それを見守る、風にたなびく大旗と、重厚な馬具を装着した無数の軍馬。
戦に赴く男たちを見送るのは、正装した妃たちだ。彼女たちは隊長それぞれに黄酒（こうしゅ）を振る舞い、無事を祈る。戦の度に繰り返されてきた、伝統的な儀式だった。
「ご武運をお祈りいたします」
桃蘭が、朱色の大きな酒杯に酒を注いで渡す。翔偉はぐいっと酒を飲み干すと、立ち上がり、愛馬に跨った。
「行くか」

静かな号令が、兵士たちの緊張を煽る。
大勢の歩兵や騎馬隊を連れて大門へと向かいながら、翔偉は古狸宮のある方向をちらりと見た。
（結局、出兵までに行く間はなかったな）
逆賊の反乱を抑えるのは、早い方がいい。もたもたしていると、勢力が拡大する恐れがあるからだ。そのため、翠雨には会わずじまいになってしまった。
古狸宮に隔離の身の彼女だが、それなりに後宮との交流はある。張螢林とは親しくしているようだし、元専属女官もたびたび様子を見に行っているようだ。戦の話は耳に入っているだろう。
（我関せずという顔で暮らしていそうだがな）
翔偉は口元をほころばせる。
だがその直後、フッと心に冷たいそよ風が吹いたように寂しさが込み上げた。
〝血濡（ちまみ）れの狂帝〟の異名を持つ彼は、戦を恐れない。日常よりも戦の中こそが己の生きる世界と自負するほど、戦が好きだった。
不遇な幼少期を過ごし、何にも生き甲斐を見い出せなかったが、戦いの中に唯一己の居場所を見つけることができた。その結果、皇帝になっただけの話だ。
いつ死んでもいいと思っていた。

後継も決めないまま消えるなど無責任だと史穀あたりは怒るだろうが、どうでもいい。そのはずが今は、なぜか死にたくないと思う。
「あれは？」
「誰だ？　女か？」
正門が近づくにつれ、兵士たちがざわついた。
我に返り顔を上げた翔偉の目にも、朱塗りの門の前に立つ姿勢のいい女の姿が目に入る。
瞬間、彼は鋭い目を見開いた。
「翠雨様だ」
「古狸宮妃だ」
兵士たちの囁き声がする。
青磁色の袴裙に身を包み、艶やかな黒髪を今日はきっちりと結い上げた李翠雨が、こちらへと近づいてくる。新緑の瞳は、まっすぐに馬上の翔偉へと向けられていた。
大勢の男たちが注目しているというのに、彼女が物怖じする気配はない。
凛とした彼女の空気に当てられてか、兵士たちが静まり返る。
李翠雨という女は、色白で華奢だ。それなのに、手練れの兵士が束でかかっても敵わないような、強い威圧感を放つことがあった。

翔偉の胸が高まり、心が震える。
彼は自分の想いを悟った。
（俺はこんなにも、彼女に会いたかったのか）
翔偉は反射的に馬から飛び下りると、翠雨と向かい合った。
そうせずにはいられなかった。
「――これを」
翠雨が翔偉に何かを差し出す。木の欠片のようなものが付いた組み紐だった。
「これは、なんだ」
「剣珮でございます」
翔偉は翠雨の手の中の剣珮をまじまじと眺めた。木の切り口がいびつだったり、組み紐が歪んでいたりする。
「お前が作ったのか？」
「はい。以前いただいた角を削って作りました」
「あの角か」
龍宮の奥の祭壇にあった鹿の角を彼女に与えたことは、記憶に新しい。おそらく、すぐそばに飾られていた絵に描かれていた半妖の女の角だ。翠雨はその角を受け取ったとき、目に涙を浮かべてまで喜んでいた。

（それほど大事なものを、削ったというのか）
「削ったといっても、ほんの少しだけですよ」
翠雨が気まずそうに視線を逸らす。
「あなたは阿呆みたいに強いので、お守りなど必要ないかもしれませんが、念のため」
「古狸宮妃は知らないのか？　皇帝陛下は愛用の赤霄剣に決して装飾品をお付けにならない」
「あんなことをして、また皇帝陛下の怒りを買うのでは」
兵士たちのそんなヒソヒソ声がした。
「ああ、阿呆みたいに強い自覚はある」
翔偉は堂々と答えた。彼が剣に装飾を付けたがらないのは本当だ。単純に、戦闘の際に邪魔だからである。
だが今は引き寄せられるように翠雨の手から剣珮を受け取っていた。
周囲が驚きの声に包まれる。
「これがあれば、もっと阿呆になれる自信があるな」
剣珮を剣の柄に結びながら答えると、翠雨がムッとした顔をした。
馬鹿にされてると思ったのだろう。

「特別な女がくれたものだ。うかれて当然だ」
一瞬でも死を恐れたからか、心の奥底にくすぶって頑なに離れようとしなかった想いが、彼の口からこぼれ出ていく。
「え」
翠雨がきょとんとした目をした。その新緑の瞳を見つめ返し、口角を上げてみせると、彼女がバッと視線を伏せる。白い頬が、ほんのり赤くなっていた。
「それから、これも……！　保存が利くからきっとお役に立ちます！」
翠雨が早口でまくしたて、陶製の壺を突き出した。
翔偉が木蓋を開けると、蕪と白菜がぎっしり詰まっている。ほんのり酸味の混ざった、青菜の香りが広がった。
「菘菜か」
「はい。古狸宮の畑でできた作物で作りました」
「うまそうだ、恩に着る」
翔偉は菘菜の壺を従者に渡すと、再び馬に跨った。
「ご武運を」
馬上にいる翔偉を見上げ、翠雨が力強く言う。
「ああ」

翔偉はひとつうなずき、馬を進めた。
立ち止まっていた兵士たちが再び動き出す。
剣の柄につけた、もらったばかりの剣珮に、不思議な重みを感じる。
彼女の視線を感じる背中に、焦げつくような熱さを感じた。

第四章　翠雨、冤罪に歓喜する

馬に跨り、朱塗りの門の向こうへと消えていく翔偉の後ろ姿を眺めながら、翠雨は混乱していた。

『特別な女がくれたものだ。うかれて当然だ』――つい先ほど彼が放った言葉が、頭の中を乱舞し、沸騰しそうなほど胸を熱くしている。

嫌いで嫌いで仕方なかったその顔を、ずっと見ていたいと思ってしまった。見ていたいがあまり恥ずかしくて直視できない、訳の分からない状況に陥っている。

ドッドッと、心拍数が上がっている。

嫌悪からくる鼓動ではないことに、翠雨は気づいていた。

安華山で川に転落したところを、彼に助けられたあたりからその気配はあった。あれほど嫌っていたため、己の気持ちの変化を受け入れがたく、翠雨は必死に目を背けようとしていた。

だがもう、認めざるを得ない。

（私は、彼のことがもう嫌いじゃないんだわ。むしろ――）

それより先の言葉を続けるのは憚られた。

人間に利用されて裏切られ、霊獣の世界にようやく居場所を見つけた前世の半妖の少女が、心の中で叫んでいる。

彼は人間を束ねる皇帝。

そんな男に心を許すなど、あってはならないと。

桃蘭から再びお茶の誘いがあったのは、翔偉が出立して数日後のことだった。

なぜまた呼ばれたのか分からないながらも、翠雨は承諾する。

（特大狗尾草（えのころぐさ）は、どうなったのかしら？）

桃蘭に使い道などないはずだから、あわよくば譲ってくれないかと期待して。

「お待ちしておりました」

桃蘭の房に入るなり、卓の上に並んださまざまな菓子が翠雨の目に飛び込んできた。

蓬色の米餅（べいべい）に、木の実を蜜に閉じ込めた蜜煎（みつせん）、朱色に染まった豆菓子もあった。

桃蘭が今日も今日とて可憐な笑みを浮かべる。

「翠雨様に喜んでいただきたくて、珍しい菓子を仕入れたのです」

「ありがとうございます。それから、再度お声がけいただけて光栄です。ですが、どうしてまた私をお呼びになったのですか？」

立ち読みサンプルはここまで